

知識の実践性から導かれる信度の閾値について

野上志学 (Shigaku Nogami)

日本学術振興会特別研究員 PD (一橋大学法学研究科)

ある命題を知っているとすれば、それに基づいて行為することは合理的であり、逆に知りもしない命題に行為を基づけることは不合理であるという考えを「知識の実践性テーゼ」と呼ぼう。関連する考えは Hawthorne (2004), Stanley (2005), Fantl and McGrath (2009) といった論者によって議論に活用されてきた。

本発表の目的は、この知識の実践性テーゼそれ自体の是非の検討ではなく、その利用法を検討することにある。具体的には、知識に対して認識的確率の最大値を要求しないタイプの可謬主義 (fallibilism) が、この知識の実践性テーゼをどのように利用できるかを検討することにある。可謬主義に対して寄せられる批判として、可謬主義がどれほどの認識的確率を知識に要求しているのか何ら明らかではない、というおなじみの批判 (Bonjour 2009) がある。可謬主義とて、どのような認識的確率しかもたない命題でも知識になりうることを認めるわけではないから、仮に実践性テーゼが認識的確率の閾値を導くとすれば、これを利用しない手はない。そして、ごく簡単な意思決定理論を利用することによって実際にこうした閾値を導くことは可能になる。

本発表のメインの部分では、実践性テーゼにおいて言及されている「合理性」をどのように理解するか (具体的には、期待効用最大化の他に課される追加の条件) に応じて導かれる閾値がどのように変わるかをみた後で、実践性テーゼ単体では、可謬主義にとって必要な閾値が与えられるとは限らず、そうした閾値はせいぜい (数ある?) 必要条件のうちの一つとしてしか機能しないことを説明する。また、時間が許す限りで (外界懐疑論や道徳認識論に関して) 閾値のもつ哲学的帰結について簡単に議論することにした。

L. Bonjour (2009) *Epistemology: Classic Problems and Contemporary Responses*, 2nd ed., Rowman & Littlefield Publishers.

J. Fantl and M. McGrath (2009) *Knowledge in an Uncertain World* (OUP).

J. Hawthorne (2004) *Knowledge and Lotteries* (OUP).

J. Stanley (2005) *Knowledge and Practical Interests* (OUP).